八鹿小学校 同窓会だより 第22号

八鹿小学校同窓会
事務局　八鹿小学校 内
〒667-0021
養父市八鹿町八鹿1045-4番地
TEL.079-662-2185　FAX.079-662-2186

ごあいさつ

会長　広瀬　栄

同窓会員の皆様、お健やかにお過ごしでしょうか。養父市では豊かな実りの秋を迎え収穫の喜びに満ちています。今年は台風による大きな被害もなく穏やかな秋を迎え、コロナ禍で自粛傾向にあった秋祭りも各地で再開されるようになりました。

第7波を迎えたコロナ禍は、県内はもちろん、但馬地域においても多くの感染者が発生し、市内においても1日の新規感染者が40人を超すこともありました。特に年少者の新規感染が増加し市内学校等で多くの児童・生徒等が感染し、感染拡大を防ぐため登校停止等が行われました。その結果、全ての学校等においては大事に至ることもなく、いつもの学習や修学旅行、運動会等の行事が行えています。

8月14日には今年二十歳を迎えた平成25年度卒業生11名が参加し、「希望の塔」開扉式を行い、12歳の自分と向き合いました。

今後は、学校においては厳しかったコロナ禍における教育活動の経験を活かし、コロナ後を視野に入れた新しい希望に満ちた教育が展開されるものと楽しみにしています。

少子化により児童・生徒の数が減り、学校等の小規模化が進んでいます。八鹿小学校も例外ではありません。児童・生徒の数が年々少なくなってきています。今後もしばらくはこの傾向が続くものと考えられます。八鹿小学校は長い歴史において地域と一体になり、有為の人材を育み・輩出し、まちの繁栄・地域づくりの拠点、原動力となってきました。この大切な地域の宝を守り維持し続けるために、同窓会をはじめ地域を挙げて少子化解消に向けて取り組まなくてはならないと考えています。

市教育委員会では、少子化が進む社会環境の中での今後の学校等のあり方や教育のあり方を考えるため、「教育のあり方検討委員会」を設けて検討に入りました。少子化は地域の存続を左右する大きな課題です。行政任せでなく市民一人ひとりが自身の問題として考え解決に向け協力することが大切と考えます。

昨年の同窓会報でも申し上げましたが、八鹿小学校は来年2023年（令和5年）に創立150周年を迎えます。同窓会としてはこの大きな節目の時に、会員をはじめとする八鹿小学校に関わりのある多くの人々の協力を得て記念となる事業を行い、八鹿小学校の歴史と、その足跡を後世に引き継ぐ必要があると考えました。役員会で協議し、創立100周年記念以降途絶えている50年間の歴史を記した記念誌を発行することとし、学校等の協力を得ながら準備を進めています。50年の歳月は長く、この間の歴史を語れる同窓会員も少なくなりつつあります。伝統の歴史に空白が生じること無く引き継いでいく考えです。記念誌編集の具体的構想等がまとまりましたら、関係者の皆様には原稿の依頼や発行に向けての資金面でのご支援等、色々とお願いすることがあると思いますがご理解とご協力をお願いします。

同窓会会員の皆さんのご健勝を心からご祈念申し上げ、ご報告、ご挨拶とさせていただきます。

「すばらしいもの」の中で育つ

養父市立八鹿小学校長　川見丈明

明治６年11月28日、屋岡小学校として創立された八鹿小学校は、来年度創立１５０周年を迎えます。その間、およそ１３，５００人もの卒業生を送り出してきたとされます。池田草庵先生が開いた「立誠舎」「青谿書院」の流れを汲む私塾「山陰義塾」が本校敷地内にあった歴史もあります。今年度は、小佐小学校と統合し、新たなスタートを切ってから11年目。草庵先生の教え、東井義雄先生の教えが息づく本校には、教育の大切さを知り、より良い学びの場を創り出そうとする情熱が脈々と受け継がれてきました。

今年度、本校では新たに「東井先生の言葉12ヶ月」を選定・設定しました。毎月の児童会目標と連動させながら、子どもたちが自らの生活を振り返ったり、より良い生き方を考えたりするための手がかりとしています。東井先生の言葉は、時代を超えた普遍性をもち、なおかつわかりやすく子どもや教員や保護者を導きます。

東井先生の数々の言葉が全国に発信された小学校として、その教えを子どもたちに受け継がせていくことは本校固有の〝使命〟だと考えます。校舎内には、たくさんの東井先生の言葉が飾られ、子どもたちを見守っています。それらをじっくりと見上げ、子どもたちにも、自分が「すばらしいもの」の中で学んでいることに気づいてほしいと思います。

さて、お盆の真っ最中である８月14日に「希望の塔開扉式」が開催されました。「希望の塔」に関わる行事は、本校同窓会の伝統的な特色ある取組の一つです。ここ数年、コロナ禍により、この時期の実施を見合わせていた本式典ですが、３年ぶりに伝統に則った日程で開催することができました。

今回、希望の塔を開扉して、卒業時に書いた「立志の書（20歳の自分への手紙）」を取り出したのは、平成25年度卒業生です。成人式を終えた卒業生たちは、本当に逞しく、さわやかな若者に成長していて、とても素敵な時間を持つことができました。

本広報にも原稿が寄せられていますが、卒業生代表で挨拶をしてくれた植田あいさんの言葉がとても心に残りました。20歳の若者にとって、小学校での生活体験がどのような意味を持っているのか、よくわかる言葉でした（ぜひ、本広報への投稿をじっくりとお読みください）。

何年経とうと、過去に起こった出来事や事実は変わりません。同窓生の皆様の心の中で、八鹿小学校時代のひとつひとつの出来事は、今も変わることなくかけがえのない思い出として残り続けていることでしょう。しかし、個々人にとってその〝意味合い〟は時とともに変化していくものなのだと思います。成長するに従って、歳を重ねるに従って、思い出の意味は更新され続け、新たな輝きを放ち続ける。新成人の皆さんも、20歳になった今をきっかけとして、小学校生活の捉え直しをされているように感じました。

本同窓会の活動や本広報が、同窓会員の皆様方にとって、当時の出来事や思い出を懐かしむとともに、新たな〝意味合い〟を発見する機会であるとしたら、とてもすばらしいことだと思います。来年度の創立１５０周年が、我が八鹿小学校の歴史と伝統を振り返り、地域や同窓会委員の皆様と新たな八鹿小学校を創造していくきっかけになることを願わずにいられません。

会員の皆様の健やかな毎日と一層のご発展を心からご祈念申し上げるとともに、未来を担う八鹿っ子たちの健やかな成長へのご支援をお願い申し上げ、ご挨拶といたします。

◆元八鹿っ子の歩み

「一通の手紙」

平成25年度卒業生　植田あい

新型コロナウイルスの収束が見通せず、さまざまな規制が残る中でしたが、伝統ある希望の塔開扉式を無事行われたことを嬉しく思います。懐かしい校舎に懐かしい先生方、また懐かしい仲間との再開に、時が戻されたような貴重な時間を過ごさせていただけたこと、このような機会を設けてくださった同窓会役員の皆様に改めてお礼を申し上げます。

希望の塔開扉にあたり、小学校時代の経験を20歳となった今、ゆっくりと思い返す時間をとることができました。私が印象強く思い返したのは、登下校でのことでした。特に高学年にあがると、地区名の書いた黄色い旗を持ち、先頭に立って学校をめざしました。その時に横断歩道を譲って下さった車や自転車に、必ず「ありがとうございました」と頭を下げていました。何気なく上級生の人の真似をして当時はとっていた行動ですが、今となるとどこか誇らしく、地域の皆さまとのあたたかい関わりを感じられ、大切な小学校時代

の一コマとなっています。他にもこのように八鹿小学校で過ごした６年間のさまざまな場面は、８年経った今、思い返すと何にも代え難い価値あるものだと感じさせられます。

明るく活発、素直で、ひとりひとりが強く進み力を合わせることの出来るそんな学年。それ故に先生方には沢山困らせてご苦労をおかけしてしまったこともありましたが、行事やさまざまな活動に対して精一杯取り組むことのできるすてきな学年であると感じます。先生方を始め、家族や地域の方の支えもあり、それぞれがいろいろなきっかけで、たくさんの成長を実感して、また将来への希望をもち、この八鹿小学校を卒業したと、改めて確認することができました。

平成25年度「立志の書」収納式

小学校を卒業し、中学、高校、大学、また社会人としてそれぞれが歩んできた道があります。その中で小学校で抱いた思いは心の中にずっと持ち続けているのではないかと思います。現在わたしは教員になるための学校に通っています。進路に悩んだ時、自分にはなにができるのだろうと振り返った時に思い出されたのは、なにごともみんなの１歩先に出て、教えてあげたい、引っ張っていきたい、そんな小学校時代の自分でした。またこうして学校生活がすてきな大切な思い出となっているのも、先生方の環境づくりであったと思ったのがきっかけで、教員への道を考えるようになりました。高校卒業と同時に新型コロナウイルスが流行し、半年間は八鹿で過ごすという、想定外の大学生活の始まりでした。戸惑いがやまず、少し気が落ちていた時もありましたが、この経験は今まで当然のように過ごしていた日常は、感謝するべき環境なのだと思うきっかけとなりました。こ

の状況になっても、するべきことは決まっていて、将来に向けて進んでいくしかありません。そう気づいたとき、お世話になった方々や、八鹿のみんなのことも思い出され、いまも私の心の支えとなっています。今まで児童生徒として考えていた学校を教師としてどう捉えていけばよいのか考え、実践していくのは簡単なことではありません。また社会の変動や、地域の環境に応じて、求められている教育も変わっていきます。この難しさや厳しさは、教師となった先にもずっと続くものだと考えています。しんどくなった時には、目指したきっかけでもある、この八鹿小学校でのたくさんの出会いや経験を胸に、自分らしく進んでいきたいと改めて思います。

現在、なりたい自分のために必死な人もいれば、社会人として責任や役割を果たすために全力な人もいます。一方で目標や目的が曖昧で将来に対して不安を抱えている人がいるかもしれません。「年齢

を３で割ると人生の何時ごろか分かる」という話を聞いたことがあります。私たちはちょうど朝の６時半から７時のあたりにいるということです。慌ただしい時間の中で、今日の一日を、自分の人生をどういうものにしていくか、もう一度ゆっくり見つめ直す時なのかもしれません。その時に迷ったり、悩んだ時には、八鹿小学校での経験が必ずどこかで支えてくれると思います。ここでの出会いを忘れずに、東井義雄先生の「自分は自分を創っていく責任者」という言葉を胸に、これからも力強く歩んでいきます。八鹿小学校でのさまざまな経験やきっかけが、この八鹿小学校で学び育ったすべての八鹿っ子の歩みを支える大切なピースとなっていくことを願っております。

希望の塔「立志の書」収納式

令和３年度八鹿小学校卒業生38名が、それぞれの夢と希望を記した「20歳の自分への手紙」を、卒業式前の３月４日に希望の塔に収納いたしました。児童、先生、同窓会等の出席のもとで、「立志の書」を木箱に収め、巣立ちの決意を行いました。

この子供たちは、９年後には成人式を迎える大人になります。同窓会行事のひとつ、希望の塔開扉式には、また元気な姿で出席してくれることを願っています。

八鹿小学校での経験

令和３年度卒業生　阿部紘希

ぼくの座右の銘は、「雲外蒼天」です。この言葉には、曇った空でも雲の上には青空が広がっている、つまり、どんなピンチも、必ず乗りこえられるという意味があります。そうして前向きに考えることができるのは、八鹿小学校での生活があったからだと思います。

今ふり返ると、八鹿小学校での生活は、とても良い思い出ばかりです。八鹿小学校に入学したばかりの頃は、同じクラスで生活する人数が増え、クラスになじむことができるのかと不安でした。でも、すぐに友達も増えていきました。小学校生活の６年間、たくさんの友達とたくさんの思い出ができましたが、その中でも一番忘れられないのは、５年生に行った自然学校です。コロナでいつも通りの自然学校はできませんでした。しかし、自然学校では、いろんな課題があり、どれも難しいものばかりでした。そこでぼくは、仲間と協力し、乗り越えていく大切さを学ぶことができました。

先日開催された中学校生活初めての大きな学校行事である体育祭。自然学校で学んだ「仲間と協力すること」を生かし、助け合ってがんばりました。そのおかげで、最高の体育祭にすることができました。

このように、八鹿小学校での出来事は、これから生きてくることがたくさんあると思います。先生や仲間と過ごした思い出、そして、僕を育ててくれた八鹿小学校の校舎は一生忘れられません。20歳になって希望の塔開扉式の時に、また八鹿小学校の校舎に戻ってくるときに、胸を張ってもどってこられるように、これからの生活を大切に過ごしていきたいです。

編集後記

◆今年は新型コロナウイルス感染症の予防対策をとりながら、８月に希望の塔開扉式を行うことができました。「同窓会総会・懇親会」は中止の判断をしましたが、少しずつ以前のような行事ができ、同窓生が集まってくれたことを大変うれしく思います。◆なかなか終わりの見えないコロナ禍ですが、八鹿小学校同窓会行事も会員の皆様のお知恵をお借りして、今後も工夫・改善しながら、会員様の絆を絶やすことなく継続していきたいと考えております。◆来年度令和５年は、八鹿小学校創立１５０周年です。今後とも、皆で同窓会の和を支え、より大きな環にいたしましょう。

なお、八鹿小学校のホームページにはカラー版をアップしています。

https://yabuboard.ed.jp/youka-es/

広報部